slow（すろ～）な まいばらの水旅

～米原の水を巡る～

ACCESS

■鉄道をご利用の場合

新大阪 ― ひかり35分 / 新快速1時間20分 ― 米原 ― ひかり2時間15分 ― 東京
米原 ― ひかり30分 / 快速1時間15分 ― 名古屋

■名神高速道路をご利用の場合

吹田IC ― 25分 ― 京都南IC ― 1時間 ― 米原IC ― 55分 ― 名古屋IC

■北陸自動車道をご利用の場合

米原IC ― 1時間55分 ― 金沢西IC

※上記は、米原駅周辺までのアクセス方法です。
湧水地等への詳細なアクセスは、裏面のマップを参照いただくか、下記までお問い合せください。

【発　　行】 米原市　経済環境部　環境保全課（伊吹庁舎）
〒521-0392　滋賀県米原市春照490番地1
TEL. 0749-58-2230　FAX. 0749-58-1630
E-mail：kankyohozen@city.maibara.lg.jp
公式サイト　http://www.city.maibara.lg.jp/

【発行年月】 2014年2月

1. 水を育む地形や地質

米原市は滋賀県の東北部に位置し、県内最高峰の伊吹山（標高1,377m）や鈴鹿山脈北端の霊仙山（標高1,096m）をはじめとする山々に囲まれ、総面積の約63％を占める森林に蓄えられた水が、一級河川の姉川（全長約31km、約367㎢で県内最大の流域面積）や天野川（全長19km、流域面積約111㎢）となって市内を流れ、琵琶湖へと注いでいます。山地が大部分を占めていますが、小さな山地の間には盆地が点在し、河川によって形成された扇状地や段丘、湖岸には三角州が広がるなどバラエティに富んだ地形です。

伊吹山とその山麓付近、霊仙山の地質は主に石灰岩で、雨水が浸透しやすく、清浄で豊かな湧水をもたらしています。これらの山々から湧出する水は硬度100mg/L前後の中硬水で、軟水が多い日本にあって硬水地帯と呼ばれています。

また、市の北部地域は豪雪地帯ですが、冬でも気温がプラスになることが多く、融雪水が渇水期の水資源として重要な役割を果たしています。降水量も、県南部の年２回の降水期（梅雨、台風）に対し、湖北地域は冬の雪で年３回の降水期となり、年降水量も約1.7倍です。一方で年蒸発散量は少なく、河川の水質も南部と比較すると窒素、リンなどが少なく、米原の河川は水量が豊かで、琵琶湖への良質な水の供給源といえます。

▲上空からの伊吹山

▲天野川河口

▲春の姉川

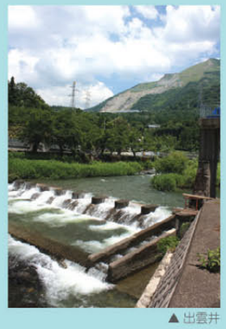
▲琵琶湖

2. 米原の農業水利

米原の代表的な農業水利は、出雲井（姉川合同井堰）と天の川合同井堰、そして琵琶湖からの逆水灌漑です。かつてはこれらの水をめぐり、集落間での水争いが絶えなかったようです。現在の出雲井は、昭和28年に造られたもので、市の山東地域と下流域の長浜市までの約660haにもおよぶ水田を潤しています。灌漑期で約３t/秒、非灌漑期で約１t/秒の水が取水されており、様々な分水施設を経て、網の目のように張り巡らされた用水路へと送られています。

特徴的な分水施設としては、扇形をした小田分水があり、出雲井からの水を小田上井と小田下井、長浜市北郷里地区の３つに分水しています。この小田分水からの水をさらに分水しているのが、間田五川分水です。また、姉川に架かる井之口橋の少し上流にある井之口円形分水も、小田分水池から流れる水を、井之口と長浜市へ分水する施設です。

天の川合同井堰は、昭和32年、市の米原地域の一部と近江地域の大部分を灌漑するために造られた井堰です。現在は天野川やその支流の丹生川の水を主に、琵琶湖からの逆水による併用灌漑となっており、約695haの水田を潤しています。灌漑期で約5.8t/秒、非灌漑期で約0.44t/秒の水が取水されています。


▲出雲井

▲間田五川分水

▲井之口円形分水

3. 暮らしと水

水道がなかった頃は、湧水や河川水、地下水（井戸水）、山水などを竹管で引き込んだ「棚池」など、自然水が直接利用されていました。湧水は年中水温が一定で、冬は暖かく夏は冷たいため、重宝されたようです。川には「カワト」と呼ばれる洗い場があちこちにあり、今も活用されているところがあります。これらの水汲み場や洗い場は共同利用されるものも多く、そこには水利用のルールがあり、人々の交流の場でもありました。地域の人と水は身近なものとしてつながり、大切に守られていたのです。

日本の近代水道の幕開けは、明治20年に給水が開始された横浜市の水道です。市内で簡易水道が整備され始めたのは昭和20年代後半で、上水道が普及した今も生活の中の水として利用されています。

また、水力は昔からエネルギーとして利用され、出雲井の井水路では直径６mの巨大水車で菜種油が製造されたり、天野川では水車で小麦が製粉されたりしていました。甲津原地区には、水の力を使って米やそばをつく「唐臼小屋」という施設が数多くありました。小水力発電の先駆けとしては、醒井養鱒場が霊仙山からの湧水を利用し、昭和4～昭和27年頃まで発電（最大15kw）を行っていました。そして、姉川を利用し、大正３年吉槻地区に建設されたのが姉川発電所（出力615kw、昭和19年廃止）で、その後、小泉発電所（昭和６年発電開始、出力966kw）、伊吹発電所（昭和15年完成、出力5,400kw）が建設されました。

▲カワト

▲唐臼小屋跡

▲姉川発電所跡

4. 良質な水を活かす

市内の良質な地下水や湧水は、飲料水や生活用水、田用水として使われるだけでなく、酒づくりや豆腐づくりなどにも用いられてきました。市の調査では、市内に16軒の造り酒屋があったことを確認しています。豆腐屋も多くの集落にあったことがわかり、現在も地下水や湧水を使って豆腐作りを営まれている店があります。

冷蔵設備がなかった時代は、発酵が緩やかに進む軟水は、酒づくりに向かないといわれていました。また、ミネラルをバランスよく含み、劣化の原因となる鉄分の少ない水が酒づくりに適した水だといわれています。「銘酒のあるところに良質な水あり」といわれるように、伊吹山と霊仙山という石灰岩質の山に蓄えられたミネラル豊富な水は、多くの造り酒屋を生み出しました。市内の造り酒屋は、戦時の食糧難で企業整備令が施行されたことや時代の変化とともに全てなくなってしまいましたが、酒づくりや豆腐づくりが盛んに行われてきたことは、米原の水が良質な水であるということを表しているといえます。

▲企業整備令で９軒の酒屋が集まった「湖北酒造」

▲かつて使われていた酒壺やラベルなど

5. 生命と水

水は、地球上のありとあらゆる生命の源です。かつて、市内の小さな川にも、琵琶湖から遡上したビワマスやアユ、ウナギ、渓流で育つイワナなどたくさんの魚が泳ぎ、ホタルの乱舞もあちこちで見ることができました。しかし、治水対策による河川改修やコンクリート化、内湖の干拓などにより水環境が悪化し、徐々にその姿を見ることができなくなってきています。人間の都合だけを優先した結果、水が生み出す多様な生態系が失われてきたのです。

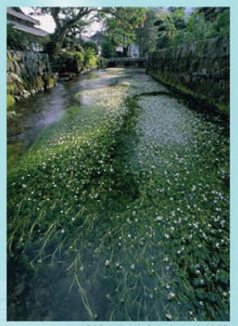
このような中、国で唯一の特別天然記念物に指定された「長岡のゲンジボタルおよびその発生地」をもつ米原市では、平成19年に旧山東町の条例を受け継ぐ形で、「米原市蛍保護条例」を制定し、市民と共にホタルの棲める環境づくりに努めています。

また、琵琶湖固有種のビワマスを市内の川に呼び戻そうと、魚道の設置等の河川環境づくりやビワマスの放流などを行うと同時に、食文化としてのビワマス料理のＰＲも行い、人と川とのつながりの再生に取り組んでいます。

▲魚道を遡上するビワマス

▲ビワマスの稚魚

▲ホタル


▲清流にしか育たない梅花藻（醒井地蔵川）

6. 水への畏敬の念

昔の人は、恵みと脅威の両面を持つ自然に畏敬の念を抱いていました。伊吹山と霊仙山は、水神を祀る霊山でもあります。伊吹山の神は白イノシシや大蛇であるといわれ、イノシシは子孫繁栄や豊作祈願の神であり、ヘビは龍神として崇められてきました。現在、伊吹山の神は山麓の伊夫岐神社に祀られ、ここを水源に開鑿されたのが出雲井で、水の神として厚い信仰を集めています。また、霊仙山中に多くある池は、龍神信仰や雨乞い行事と深くかかわっています。

農耕を中心とする日本の社会では、干ばつは最大の悩みで、雨乞い行事は重要な共同祈願として行われてきました。代表的なものは、集落の氏神に三日三晩籠る「参籠」です。ほかにも聖地から水をもらってくる「水種貰い」、戸谷の岩屋（伊吹山）や各地にある雨壺などへの参拝、伊吹山麓地域に多くみられる太鼓踊りなどがあります。

一方、私たちになくてはならない「水」は、時として災害を引き起こす恐ろしいものでもあります。武田信玄が考案したといわれる「霞堤」と呼ばれるものが、かつて姉川や天野川にもたくさんありました。これは、自然の理に従い水害を最小限に抑える昔の治水の知恵です。技術の進歩により、昔に比べ水害の頻度は少なくなくなりましたが、近年の異常気象や大地震など人間の力が到底およばないのが自然の力であり、昔の人のように自然と居り合いをつけて付き合っていく必要があるのではないでしょうか。

▲伊夫岐神社

▲霊仙山のお池

▲伊吹山奉納太鼓踊

未来に伝えたい まいばらの水MAP

２つの名水を有する米原市には、ほかにも多くの美しい湧き水や滝、そして水にまつわる生活文化が存在しています。昔、水はもっと私たちの身近にあり、地域で大切に守られ、その恵みも脅威も肌で感じることができていました。しかし、水道の蛇口をひねればあたり前のように水が出てくる便利な社会の中で、これらの水や水を育む山、森といった地域の自然と私たちのつながりは薄れ、自然の恵みによって生かされていることが見えにくくなってしまいました。

そこで、ありとあらゆる生命の源である「水」と私たちの暮らしを再び結び直し、水源の里まいばらの美しい水環境を次世代に受け継いでいこうと、平成24年９月に「未来に伝えたい“まいばらの水”」を選定しました。この「まいばらの水の旅」を通して、忘れられつつある水や水を育む森の大切さ、自然と共に生きる意味を改めて感じていただき、地球の美しい水環境を未来へ受け継いでいくきっかけとなることを願っています。

1 名水百選「泉神社湧水」（大清水）

伊吹山からの生命の水ともいわれ、石灰岩の間を縫って湧き出た水はミネラルが豊富で、湧水量は１日に約4,500ｔある。伊吹山の神に敗れた日本武尊が、この水を飲んで正気を取り戻したとされる伝説の水の一つ。（99mg/L）

2 平成の名水百選「居醒の清水」（醒井）

霊仙山系の伏流水と考えられ、醒井宿を流れる地蔵川の源流で、日本武尊伝説が残る地の一つである。地蔵川には、清水や湧水にしか生息しないというハリヨがいたり、梅花藻という白い可愛らしい水中花が咲く。（88mg/L）

1 未来に伝えたい『まいばらの水』白山神社湧水（曲谷）

神社一帯は湧水地帯で、御手洗も湧水。周辺の家では湧水池がつくられ、生活に利用されてきた。夏は冷蔵庫代わりに、冬は雪かきの手を温めるなど人々に重宝され、東草野の山村景観を特長づける水利用である。（14.1mg/L）

2 未来に伝えたい『まいばらの水』奥泉口（小泉）

奥泉は縄文の遺跡で、またこの近くの伊吹山の中腹、標高約450mに、かつて太平寺と呼ばれる伊吹山護国寺の一つがあり、中世には京極氏により城郭化された。この城跡の麓のあちこちから水が湧き出している。（91.7mg/L）

3 未来に伝えたい『まいばらの水』桶水（小泉）

伊吹山麓の棚田の上に滔々と流れ出る「桶水」は、昔から田用水や生活用水に利用されてきた。幻の伊吹城の用水であったともいわれ、江戸時代、山形藩によってつくられた三方石畳み方式の水路は貴重な文化遺産。（79.6mg/L）

4 未来に伝えたい『まいばらの水』ケカチの水（上野）

伊吹山麓の洞窟から湧き出る清水は、飲料水や生活用水として大切にされてきた。かつては山岳修行の行者がこの水で身を清め、山中の行場を巡って山頂の弥勒堂を目指したという。日本武尊伝説が残る地の一つ。（110.4mg/L）

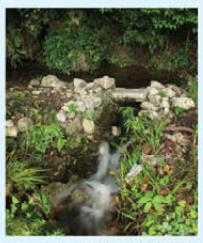
5 未来に伝えたい『まいばらの水』行者の水（弥高）

弥高白坊跡の近くにある役の行者堂（弥高護国寺を開基したという役の行者が祀られている岩窟）付近から湧き出る清水。この水は、弥高寺を支えた水といわれ、かつての集落の水源であり、涸れることはない。（7.8mg/L）

6 未来に伝えたい『まいばらの水』臼谷（春照）

昔はこの一帯は森で、水量も今よりもかなり多く至る所から湧き出ており、どこが川か見分けがつかないほど一面に水が溜まっていたといわれている。小碓の清水とも呼ばれ、日本武尊伝説が残る地の一つ。（142.5mg/L）

7 未来に伝えたい『まいばらの水』小碓谷の湧水（間田）



小碓の泉ともいわれるこの湧水は、昔から地域の人々に田用水や生活用水として利用され、かつて小川沿いにはたくさんの洗い場があった。日本武尊伝説が残る地の一つ。（140mg/L）

8 未来に伝えたい『まいばらの水』白清水（柏原）

古くから、白清水または玉の井と呼ばれている。中世の仏教説話「小栗判官照手姫」には、姫の白粉で清水が白く濁ったことから白清水といわれるようになったとある。日本武尊伝説が残る地の一つ。（12.5mg/L）

9 未来に伝えたい『まいばらの水』子宝の水（梓河内）

霊仙山麓の神明神社境内に昔から湧き出ていた清水で、人々は盆になるとこの水を汲んで仏壇などに供えていた。飲用することにより子宝に恵まれたという話があり、地域では子宝の水として参拝する人もいたという。（92.2mg/L）

10 未来に伝えたい『まいばらの水』宇賀野湧水群（宇賀野）

清水が豊富に湧き出る集落で、かつて数多くあった自噴井戸は、飲料水や生活用水に利用されてきた。神明公園や戦国武将山内一豊の母・法秀院が住んでいた長野家などから湧き出る水は、川となり集落内を流れ、琵琶湖へ注ぐ。（91.8mg/L）

11 未来に伝えたい『まいばらの水』世継のカナボウ（世継）

カナボウとは、水の湧き出ている自噴井戸と洗い場の総称で、井戸つきの金属棒や湧き出る水のカナケに由来するともいわれている。水源は遠く霊仙山に発するといわれ、かつては生活全般に利用されていた。（73.4mg/L）

12 未来に伝えたい『まいばらの水』十王水（醒井）

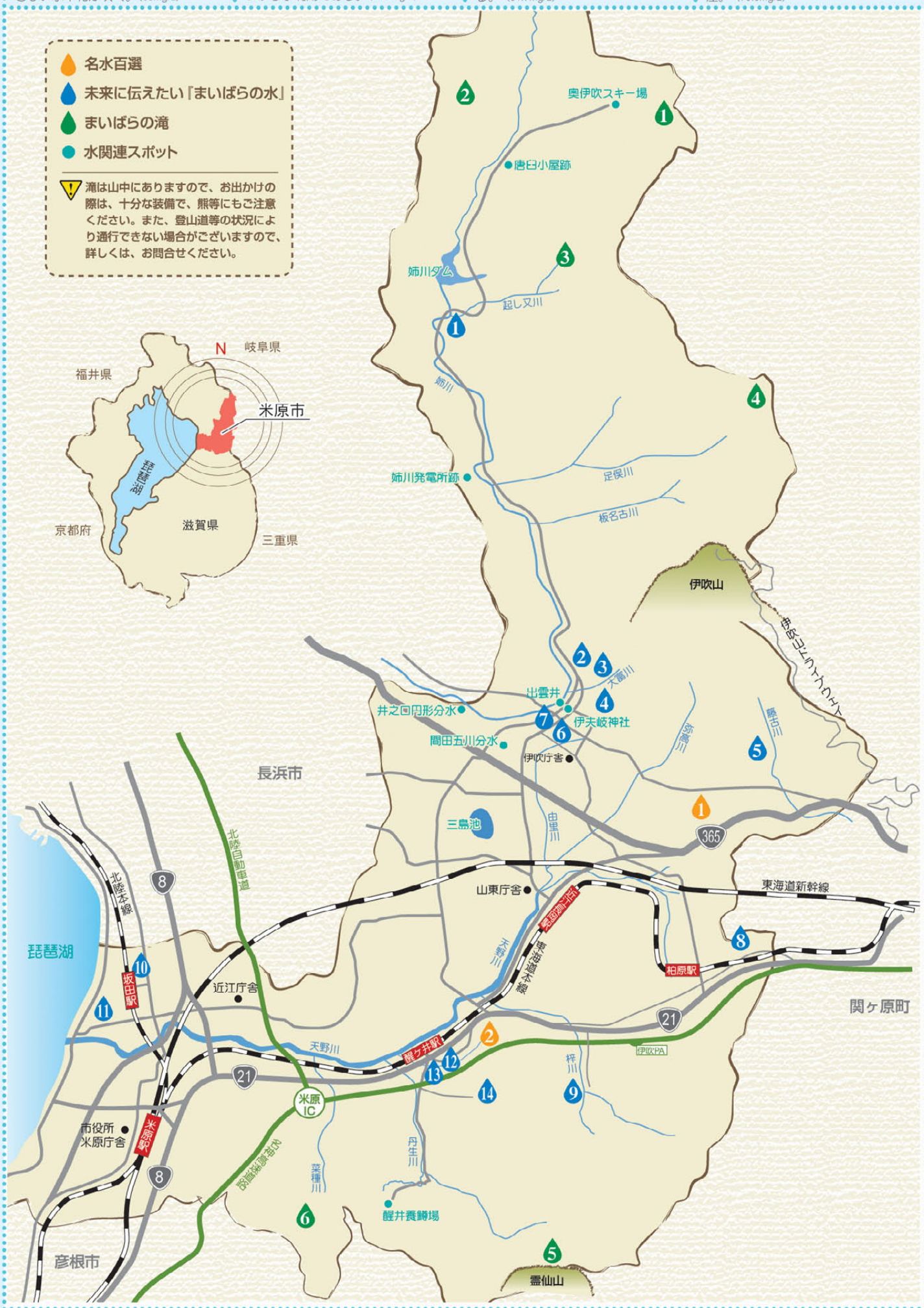
中山道沿い醒井宿の湧水。昔、浄蔵貴所が山の岩石の下をへこめたところ、清水が湧き出し、どんな大干ばつでも涸れないと伝えられている。近くに十王堂があり、後世になり十王水と呼ばれるようになったという。（106.4mg/L）

13 未来に伝えたい『まいばらの水』西行水（醒井）

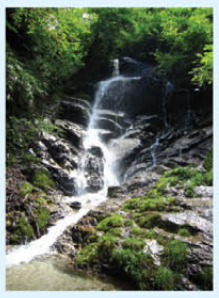
12と同じく醒井宿の湧水。西行という僧侶に一目ぼれした茶店の娘が、西行の飲みほした茶の泡を飲んで身ごもり男の子を生み、西行が「まことに我が子なら元の泡に戻れ」と言うと泡に消えたという昔話が残されている。（106.8mg/L）

14 未来に伝えたい『まいばらの水』天神水（枝折）

背後の石灰岩の山々に浸透した雨水が湧き出ているといわれ、集落内を流れる枝折川へと注ぐ。水は涸れることなく、昔から生活用水や農業用水として不可欠な水であり、天満宮を祀り人々に崇められている。（100.6mg/L）



1 まいばらの滝 大長谷の滝



奥伊吹スキー場の入口辺りから続く大長谷上流にある落差約20mの大きな滝。

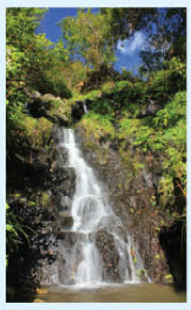
2 まいばらの滝 夫婦滝

鳥越峠に向かう途中、石畳のように重なり合った岩場を流れ落ちる。言い伝えによれば、昔ここに子どものない老夫婦が暮らしていたが、ある大雪の年の春、家が跡形もなく消え、かわりに今まで見たことのない２つの滝が流れていた。

3 まいばらの滝 五色の滝

起し又川を上流へと行くと、一の滝、二の滝、三の滝、四の滝という小さな滝が順にあり、最後に大きな花崗岩をなめらかに流れ落ちる壮大な滝が現れる。周辺は、昔の石切り場の一つで、その跡が残されている。

4 まいばらの滝 宮滝



岐阜県旧春日村と米原市を結ぶ古街道の国見峠近くにある滝で、昔ここにお宮さんがあったといわれている。この辺りはさされ谷と呼ばれ、滝は黒さされ石の上を流れ落ちている。

5 まいばらの滝 漆ヶ滝

霊仙山の中腹、標高約700mにある落差約19mの二段の滝で、２億年以上前に火山活動により形成されたといわれている。近くにうるしの木がたくさんあるためこう呼ばれているが、霊仙滝という名前も残っている。

6 まいばらの滝 青龍の滝

霊仙山系の一級河川である菜種川源流近くの滝で、昔は滝を信仰する信者によって守られていた。山仕事の人や武奈（彦根市）からの旅人が飲み水に利用したといわれ、中世の山城である鎌刃城の水源でもあった。

※名水、まいばらの水は、飲用を推奨するものではありません。※各湧水の（　）内は硬度を表しています。